



宮崎 貴良さん・咲紀子さんご夫妻

- ・出身：貴良さん（高知県）咲紀子さん（伯耆町）
- ・南部町居住歴：3年目
- ・家族構成：富永武子さん（咲紀子さんの祖母）

貴良さん、咲紀子さん、

あまね 海寧くん（7歳）、いおり 偉絃くん（10ヶ月）

今回の里人は、移住者さんファミリーである宮崎さんご夫妻。南部町三崎に3年ほど前に移住してこられた宮崎さん一家の移住のきっかけや、暮らしについて伺いました。

“移住するまで”

出会いは大阪だったというお二人。

ご主人の貴良さんは高知県出身で高校卒業後、兵庫県尼崎市に就職した。

仕事をしながら音楽活動をするという生活を9年ほど続けていた。しかし、なかなか思うようなバランスで仕事と音楽活動が両立できなかつたので、仕事を辞めてアルバイトをしながら音楽活動をしていたそう。

一方奥様の咲紀子さんも高校卒業後、大阪に進学。保育士になるために専門学校に通い、その傍らでアルバイトをしていた。そのアルバイト先が同じだったことがきっかけで付き合いだした二人は、その後結婚し、第一子である海寧（あまね）くんが誕生した。

子育て環境や、何かあった時に頼れる人がいるということを考え、ゆくゆく高知か鳥取どちらかの両親の近くに住むほうが安心だという話を以前からしていた貴良さんと咲紀子さん。

鳥取を選んだ1番の理由は咲紀子さんの実家が近いということ。ひとり娘の咲紀子さんのお母さんは伯耆町に嫁いでいるため、咲紀子さんの祖母である武子さんが一人暮らす南部町の家を継ぐ人がおらず、武子さんも高齢になってきたという色々な理由から、南部町に引っ越して一緒に暮らすことを決めたそう。

引っ越しにおいては、祖母の家に住むということで、移住において大きな決断の一つとなる「家探し」や、地域に馴染むという部分では地域のルールなどわからないことは祖母に聞けたし、咲紀子さんにとっては実家が近くなった安心感もあった。全く何の縁もなく南部町に移住してくることを考えると、ハードルはずいぶん低かったと思うと話す。

“新しい生活”

貴良さんの出身地も田舎なのだそうだが、漁師町なので田んぼに囲まれている南部町の風景はとても新鮮なのだとか。

同じ田舎でも、地区の集まりごとなどは高知の地元よりも南部町の方がずっと多く、休みの日は何かしら地域活動があるのが少し大変に感じる部分もある。だが、みんなで町を守っていこうという姿があるのはとてもいいことだと感じているそう。



実は移住後、最初に勤めた会社は退職し、今の会社は二社目になる貴良さん。

初めに勤めた会社では人間関係など苦勞する部分があったり、怪我が続いたり新しい生活と仕事を並行するには大変なことが多かった。現在は安来市に勤めていて、仕事も生活も落ち着いてきたと話す。

大阪での生活は楽しかったし便利だったけど、隣に住んでいるのが誰かも知らないくらい人との関わりが薄かった。

南部町の暮らしは人と人の距離が近い分、安心感もあるが特に初めは戸惑うことも多かったと話す咲紀子さん。

近所の人みんな知り合いだし、家の鍵も開いている。休みの日には子どもだけで友達の家に行ったり来たりすることにも驚いたそう。

また、これは“田舎あるある”だが、ご近所さんから同時期に旬の野菜を大量に頂くことや、魚を買ってきたその日に大きな魚を頂くなんてこともしばしば。

消費するのは大変だが、野菜には困らないし田舎は物価が安いという部分はとても、ありがたいと話す。

子育てにおいては、大阪で年長まで過ごした海寧くんが保育園で大阪弁をしゃべるので、イントネーションの違いから周りの子どもがそれに反応し、少し精神的に苦勞することもあった。

小学校に入り、学校まで歩く距離が40分以上とその遠さには驚いているが、学校生活も落ち着いてきたようで、親としても安心できるようになってきたそう。

移住前は、「こんないいことがあるかな」と想像していたことが、移住してすぐには全く感じられず、3年目になってようやく色々なことが落ち着きだして、良い部分が見えるようになってきた。

“出会いと音楽”

音楽を辞めて南部町に移住してきた貴良さん。

2年ほど前から町内に住むメンバーで「月光」というバンドを組み、「てまおん！」という町内の音楽ライブを中心にイベント出演したり、米子駅前の立ち飲み屋で定期的に演奏したりしている。

この「月光」のメンバーが実に面白い。宮崎さんはドラムで、ボーカル・ギターは三崎在住で駅前の立ち飲み屋店主もしている三原わたるさん。そしてベースはなんと天萬の大安寺の住職である松尾昭倫さん。

ボーカル・ギターのわたるさんは、自身の音楽活動の傍ら、立ち飲み屋の店主以外に他のイベントの出演依頼を受けたり、全国から面白い歌い手さんをお店に呼んでライブをしたりする。

また、町内で音楽イベントをしようと「てまおん！」を始めた発起人。

たまたま、わたるさんの住む三崎に宮崎さんが引っ越して来て、お子さんも同い年。

移住後、町内のお祭りで話したら、その次の日にはわたるさんの家でお酒を一緒に飲むことになり、そのまま練習室で音を合わせてみて意気投合した。

そうして二人で結成された「月光」だったが、その後

これもたまたま大安寺の住職である昭倫さんがわたるさんのお店に訪れた。

そして話の流れで一緒に音楽を合わせたら、“面白い！”となり、現在のメンバーになったのだとか。



バンドの練習は音楽スタジオの他大安寺でもやっているというのもまた斬新。

移住して暫くしていい出会いがあり、趣味としてまた音楽をできてとても良かったと貴良さんは話す。

3年経ってようやく色々な生活が落ち着き、楽しめるようになってきたと話す宮崎さんご夫妻。

どの様な環境であれ、“移り住むこと”はやはり大きな変化。

また、文化も習慣も大きく違う都会から田舎への移住は、“慣れる”までに時間もかかる。新しい生活を“楽しめる”ようになるまでは、いくつか山を超えなければならないかもしれない。

ただ、その中で新しい人と繋がり面白い“縁”があることも「移住」の醍醐味の一つなのだろう。



渡邊舞 (わたなべまい) /大阪府出身
南部町地域おこし協力隊

～取材者の一言～

私も同じ“移住者”の立場として、都会と田舎の文化の違いやルールなどへの戸惑いは特に共感する部分がたくさんありました。

また、地域の集まりに出たり、掃除をしたりすることで、自分が地域の住民の一員であるということ強く感じたことが、移住して一番感じた都会と田舎の違いでした。

移住は大きな変化であり、落ち着くまでは時間がかかるのですが、そこで出会う新しい人も文化も都会に住み続けていたら出会わなかったもので、その“縁”や“気付き”も面白いなあ今回取材をして改めて思いました。